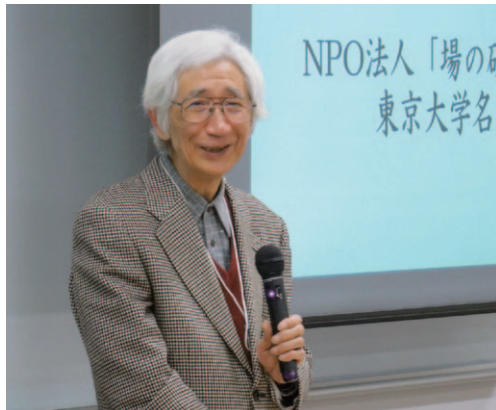


講演会報告

清水 博「女性と〈いのち〉の場づくり」

下田歌子研究所 主任研究員

伊藤 由希子



清水 博氏

2015年2月26日(木)、NPO 法人「場の研究所」所長・東京大学名誉教授の清水博先生を講師にお迎えし、下田歌子研究所講演会「女性と〈いのち〉の場づくり」を渋谷キャンパス創立120周年記念館503教室で開催した。平日の夕刻、しかも強い雨が降る真冬の寒い日であったが、約65名の方がご来場くださった。

清水博先生はもとは複雑系研究の第一人者で、そこから、生命・〈いのち〉を個々のばらばらなものから考えるのではなく、それらが存在する「場」という観点から捉えなおすことの可能性を考え、場の理論・場の思想の研究を進めてこられた。今回のご講演では、場において女性たちが担ってきた〈いのち〉をつなぐいとなみについてお話をいただいた。

清水先生のご講演の概要は以下のようなものであった。

〈いのち〉とは単なる物質的な「生命」ではなく、すべての生きものがもっている、存在を持続させようとする能動的な^{はたら}活きのことです。この写真は私の自宅の駐車場の写真ですが、枯葉といういわば死んだものでありながら、そこになにかの植物

の種が飛んでくると、新たな芽生えが起こります。枯葉がもっていた、「能動的に生きようとする〈いのち〉の^{はたら}活き」がまだ存在しているわけです。



海を泳ぐ魚を鳥が食べることで、魚がもっていた〈いのち〉が鳥の〈いのち〉になっていくように、死は、種を超えて〈いのち〉を伝える^{はたら}活きをしています。今の常識では、死んだら物質になると考えるわけですが、そのような浅い考えでは生きものの世界を理解することはできませんし、競争原理だけで生きものの世界を理解してきた今までの考え方では不十分です。ある生きものが生きていくためには、他の生きものが生きていることが必要で、つまり生きものは「共存在」というかたちで地球上で続いてきたわけです。生きものは場をつくってコミュニケーションしながら一緒に生きてゆける「共存在」の状態をつくっており、その意味で場とは生きものの共通言語であると言えます。

私たちの身体は約60兆個の細胞からできています。細胞はそれぞれに〈いのち〉をもって独立している。それらを包んでいる、私だったら清水博としての〈いのち〉があるわけですが、じゃあ清水博の〈いのち〉はどこから来たのかを考えれば、地球というひとつの大きな〈いのち〉があって、その中にいろいろな生きものが生きていて、わたしの〈いのち〉もそこで生まれて生きて死んでゆく。そういうふうには私たちは〈いのち〉の二重性を生きており、そこでは死ということも大事な生命現象ということになります。

私たちは弱者を食べながら、つまり弱者の〈いのち〉

ち)を受けながら強者の〈いのち〉を持続させているわけですが、その弱者を食べ尽くしてしまえば、強者も存在できなくなってしまいます。もしも地球が無限大で、いくら食べ物をとって無くならないというのであれば強者の側の論理でやっていけるかもしれませんが、現実には地球は限りがあるわけで、そうしてみれば、強者の存在を決めているものは弱者であると言えます。弱者があつてこそ強者も生きていくことができるし、弱者と強者が一緒に生きていくから、「共存在」の場もできる。強いとか弱いとかに関係なく、地球の上で一緒に存在しているということに価値があるのです。

居場所に自分の〈いのち〉を差し出すことを、私は「与贈」と言っています。子どもの笑顔が見たいと思ったお父さんが乏しい財布をはたいてケーキを買っていく。つまり自分が差し出す、与えるということが喜びになり、家庭という居場所の〈いのち〉がはたらき出すことが、〈いのち〉の「与贈」ということです。自分中心主義でやっていたら家庭は崩壊します。一般的な「贈与」という言葉が、贈り手の名前があきらかについたかたちで与えることであるのに対し、「与贈」は名前をつけず、見返りを求めずに〈いのち〉を差し出すことと言えます。

そして家庭がうまくいくというのは、そこで一番弱い者がきちんと生きていける、みんなが存在できるということです。つまり弱者の論理は、「共存在」の論理です。日本は古くから自然災害が多いことで、コミュニティーで一緒に生きていくという弱者の論理が形成されてきました。それは家庭においても、弱者の居場所をつくるという母の知、母性として伝わってきていると私は思います。下田歌子女史がこの地に学校をつくり、家政というものを重視したその根底には、やはり弱者の論理というものがあるのではないかと考えています。

こういう「与贈」ということを、地域社会や地球にまで広めることが、今後ますます必要になってきます。北海道の浦河に「べてるの家」という精神障害等をかかえた人たちの施設があります。ここでは当初、専門の先生が患者を診るということをやっていたのですが、助ける一助けられるという関係を越えた患者さん主体の施設をつくることで、新しい世界が生

まれてきた。いわば弱さということに視線を移したからこそ新たな社会が見えてきたわけです。あるいはいま、南愛知に「医療生協」という組織が生まれてきています。ここでは認知症の方が一緒に生活し、みんなが助け合う関係をつくることで、自分ができることを発見し、それによって認知症が改善されていくという療法が行われているのですが、それをバックアップしたのは地域の女性たちでした。また、島根県の「生協しまね」を中心に、地域社会を「大きい家」にしていこうという動きがあつて、それを担っているのも地域の女性の方たちです。家庭の中の知恵を地域に開くことによって新しい世界が生まれてきているのです。

私は、女性には、〈いのち〉の夢を育てる愛の力があると思います。そしてその夢を、家庭の外へも開いていくことによって新しい社会が生まれ、女性自身も生かされていき、その〈いのち〉が次の人へと受けつがれていく。そういう女性による〈いのち〉の夢の共創には、世界を変えていく可能性があると思っています。

以上のような清水先生のお話の後の質疑応答の時間には、先生のご講演に触発されたさまざまな質問や意見が出され、聴講者それぞれがさらに考えや理解を深めることができたように思う。清水先生がご提示くださった視点・論点を、下田歌子研究所でも継続して考えていきたいと考えている。(本講演の詳細な記録は、年度末に発行予定の下田歌子研究所年報に掲載予定です。)



学生向け資料「下田歌子の足跡を追って Uta と私のイギリスの旅」制作について

短期大学部 英語コミュニケーション学科 教授

三田 薫



チェルトナム・レディース・カレッジのドルシア・ピール胸像の前で
右から Ms. Rachel Roberts、アナマリア先生、筆者

私は2015年3月23日から7日間、英語コミュニケーション学科の出張として、イギリスを訪れました。目的は、下田歌子のイギリス滞在について詳しく紹介する学生向け資料を作成することになりました。

英語コミュニケーション学科は、英語力向上と同時に国際感覚を身に付けさせるという学科の特性上、下田歌子が100年以上前に海外で経験したことと、それを土台にして帰国後に成し遂げたことに注目しました。そこで学生たちにイギリス滞在中の下田歌子について伝え、学祖をより身近な存在として感じてもらい、また自分の将来のロールモデルとして理解してもらえるような資料を作りたいと考えました。その資料作りのため、アナマリア・イステイチョアエア・ブドウラ専任講師と共にイギリス視察の旅に出ることになりました。

資料制作にあたっては、海外生活や英語学習の苦労話、チェルトナム・レディース・カレッジ訪問前後の出来事やドルシア・ピール校長との交流、ビクトリア女王謁見の舞台裏話を盛り込み、人間下田歌子の側面を浮かび上がらせるようにしました。また学生が親しみを感じられるよう、案内役として Uta を設定し、学生自身が一緒にイギリス旅

行している気分になるような資料とすることを心掛けました。

取り上げる内容については、できるだけ下田歌子自身が残している文章を活かしてリアリティを持たせると同時に、その現代語訳をつけることによって学生が理解しやすい資料とすることを目指しました。この資料制作にあたっては、下田歌子研究所非常勤研究員の愛甲晴美さんに大変お世話になりました。また同研究所所長の湯浅茂雄先生、同研究所職員の浪岡正継さんには全面的にご協力いただきました。

下田歌子の海外体験についての知識を毎年学科の学生に確実に浸透させるため、制作資料は1年生向けの学科専門科目「基礎演習」の学祖教育で活用しやすいパワーポイント資料として作成しております。この資料により私自身が今回のイギリス視察で強く感じた「国際人」としての下田歌子の生き方が学生たちに理解され、学科のミッションが果たされる一助となることを願っております。

下田歌子の足跡を辿るイギリス7日間の旅を終えて

短期大学部 英語コミュニケーション学科 専任講師

アナマリア・イステイチョアイア・ブドウラ



バッキンガム宮殿の前で筆者

私はルーマニア人ですが、両親の仕事の関係で長く海外に住んでいました。自分自身の経験から、ルーマニア人としてのアイデンティティとグローバルな姿勢のバランスが取れると、世界のどこにいても活躍の場が見つかることに気がつきました。私は海外で暮らす中で、自分の国をより深く理解しアピールできるようになったと同時に、様々な国の良いところを吸収して、今の自分になったと思います。

今回、イギリス7日間の旅の機会を与えられ、実践の創設者の足跡を辿りました。旅行を通じて、下田歌子が日本初のグローバルな女性の一人であると言っても言い過ぎではないということに気がつきました。グローバルな人間になるためには、他人頼みでなく自分から積極的に行動する姿勢 (proactive)、他人と共感できること (empathy)、そして開かれた心 (open-minded) の3つが欠かせないことを、自分の経験から感じています。下田歌子が海外で体験した言語習得の苦勞、海外生活の楽しさと苦しさ、国際的ネットワーク作りについては、自分の経験と重なる部分が多くありました。

旅の最初にチェルトナム・レディース・カレッジを訪問しました。下田歌子が100年以上前に訪れた学校を視察して、その教育の素晴らしさに触れ、実践が誕生する源泉がここにあることに気がつきました。チェルトナムの卒業生がそうであるように、女子教育が国の将来のリーダーを作る力になること

に、改めて気づきました。

その翌日はケンブリッジ大学のニューナム・カレッジとヒューズ・ホールを訪れ、女性が大学生として full membership を持たなかった時代から戦い続けてそれを勝ち取った歴史を知ることができました。

ロンドンに戻った後は、下田歌子がしばらく滞在したゴルドン夫人邸宅跡と、次に下宿した住居跡を訪ねました。下田歌子がゴルドン夫人にいろいろなところに連れて行ってもらったり、様々な人脈作りを助けてもらったりしたことは、ゴルドン夫人が親切であるというだけでなく、下田歌子の国際人としての人柄が関係していると私は考えます。彼女に積極的な姿勢、共感できる力、開かれた心の3つの要素が備わっていなければ実現し得なかったことであると、私自身の経験からも感じています。

次にバッキンガム宮殿を訪れました。私は下田歌子がビクトリア女王に謁見したという事実よりも、彼女が日本の礼装で堂々と振る舞い、見る人に強い印象を与えたことに注目しています。これも日本人のアイデンティティと国際的理解力を兼ね備えた彼女だからこそ達成できたことです。

下田歌子は日本女性のアイデンティティと国際人の姿勢のバランスが見事に取れている方です。実践の卒業生も彼女の様なバランスの取れた人材となり、社会のリーダーとして活躍してくれることを願っています。

新収資料紹介

2014年度に本研究所が新たに収集した、下田歌子直筆資料及び関係資料の一部を紹介する。



短冊(書幅) 下田歌子 筆

水邊萩

あげまきがにほひいれこし路ならじ
野川の萩の散り乱れたる

圓山應祥が描いた[萩画]に、下田歌子作の短歌「水邊萩」を貼りつけたもの。

圓山應祥(1904-1981)は、江戸後期の画家圓山應挙の五世末裔應陽の子で、本名は国井謙太郎。

圓山派七世を継承。花鳥風月の画風を継承し、圓山派の鑑定士としても知られた。

下田歌子と圓山應祥の直接の関係は、生存年代が異なる事から接点はないと考えられる。この画と短冊は、別々に収集されたものを、後代の好事家が画に短冊を貼りつけたものと推察される。

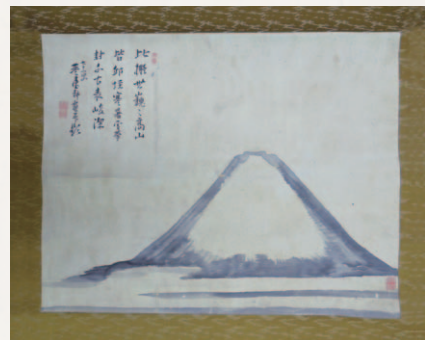


扇子 下田歌子 筆

湊川懐古

みなとがは水はかかれても^{あめつち}天地に
あふるゝものは誠なりけり

扇に和歌や絵を書いて儀礼や贈答に用いた風習は、平安朝の時代からあり、下田も幾つか残している。



書画幅 東條琴台 画賛

(題名なし)

比擬世巍高山
皆邱垤寒暑雪華
封千古表峻潔
七十二叟琴臺耕画并題

下田歌子の祖父東條琴台(1795-1878)が数え年72歳[慶応2年(1866)]の時に作られたもの。

耕は名。叟は年寄りの意。

下田歌子先生 について

II

愛らしい短歌

『東路の日記』の短歌

窓日短歌会元同人
村上 廣元



昭憲皇太后御尊影



明治天皇御尊影

元旦はどちら向いてもお芽出たい
赤いべべ着て昼も乳呑む

(満四歳五カ月での作)

伝記が、「最初の歌で周囲一党の快笑の話題となった」と伝えている作品。母乳を長く与えると健康に育つとされた当時、弟さんが六歳下だったので、鉦さんは、母乳を独占していたのでしよう。上の句は、大人の会話そのまま、人生経験も世間智も無に等しい幼児にしては、こましゃくれた表現です。下の句には、女兒の喜びが溢れています。この上と下との表現内容の落差が、愛らしさをユーモラスに際立たせ、増幅させています。

勤皇派と佐幕派との対立が尖锐化した幕末において、岩村藩は、勤皇思想を抱く父上の録蔵さんを幽閉に処し、俸禄も殆んどない身としました。幽閉後に最初に迎えた安政五年（一八五八）元旦、鉦さんはこの歌が出来ると、大喜び大急ぎで「お婆さま」（祖母貞さん）に報告したと伝えられています。この歌は、不遇の家庭に咲いた一輪の元日草（福寿草）のように、愛らしく思われます。

夕立のはれて薄霧立ちこめて

雲るに見ゆる山の峯かな

(満五歳一〇カ月での作)

雨後の爽やかな遠景を初々しく捉えました。

明治四年（一八七一）旧暦四月、程なく満一七歳の鉦さんは、故郷岩村（現岐阜県恵那市岩村町）から、東京の父上を頼りに初旅に出発、四月末に父上の所に到着しました。従者は、家僕とその娘（鉦さんより三歳程年上）の二人でした。その紀行文『東路の日記』は、『伊勢物語』を意識した書きぶりです。短歌三十三首を鏤め、初々しさと瑞々しさとが溢れんばかりの名文です。故郷を後に東京で学ぶ女子大生に、ぜひ一読を、と、お薦めします。

綾錦着てかへらず三国山

またふたたびは越えじとぞ思ふ

固い決意と強い意思を示す歌。三国山は、尾張・美濃・三河の国境の山（標高七〇一m）と伝記が記します。故郷の顕彰碑が大書している著名な歌です。うら若い乙女の歌碑は、全国各地を尋ねても極めて稀であろうと、想像するだけでも私は楽しくなります。

駿河なる宇都の山べにうつつにも

夢にも人にあはぬなりけり

(『伊勢物語』第九段)

するがなるうつつの山路のうつつをば

ゆめにも知らで我は越えけり (鉦さんの歌)

「うつつの山路」は、宇都谷峠。鉦さんは、平安時代に比して旅人の多い峠路に驚くとともに、幸いお

駕籠の中にて眠りました。

「かこにも少し慣れて、今日は打ち乗りつ。眠り眠



『凜として』
仲 俊二 著
2014年 栄光出版社

りてぞ行く。」

と、軽快に筆を運んでいます。古の『伊勢物語』の主人公の中年男は、宮仕えが思わしくなく、峠を越えて、東下り〴〵をしました。明治の乙女は、青雲の志を胸に峠を越えて上京、まさかの宮仕えにより大なる出世を成し遂げました。しかし、この日記では、未来の運命など夢想だにしていまませんでした。眠りから覚めたさわやかな気分、丸子宿に着き、鉾さんはほっとしました。民家の庭に清楚な花が咲き出す春の陽気でした。

数ふればまりの里にてこてまりの

花二つ三つ咲き初めにけり (こてまりは小手毬)

地名と花の名とを掛けた属目詠。旅人である乙女の視線が、花を捉えた気負いない自然体の一首です。やさしい感性が漂い、歌境において「綾錦……」とは対極にあると感じられます。やさしく豊かな感性と固く強い意思とによる短歌表現は、鉾さんの人間性に根差しているものと、私は感受しております。ところで伝記は、乙女の初旅の扮装を

「藤色の縮物の縮緬、髪はその頃の銀杏返し、それに菅笠、脚絆、草鞋ばき」

と考証し、美しさに讃辞を惜しまないとともに、五〇歳頃の検査記録の身長五尺 恰度(約一五一cm)、体重一三貫五百匁(約五二kg)も紹介しております。

『歌子誕生』の背景

慶応三年(一八六七)夏、緑陰涼しい京都御所で
天皇と寿栄君(一条勝子)とのお見合いがありました

た。翌日、結納の勅使が派遣されて、翌年(明治元年)の年末、婚儀が営まれました。明治天皇(一八五二―一九一二)満一六歳、美子皇后(天皇の希望で改名、一八五〇―一九一四)満一八歳の時でした

『明治天皇と昭憲皇太后』外山勝志監修 善本社 平成一九年刊)。両陛下は、敷島の道(歌道)を大層好まれ、東京遷都後には、宮内省に御歌所を設け、日常的に歌御会(当時の歌会の通称)が開かれておりました。両陛下が残された和歌(当時の短歌の通称)は、なんと数万首に達すると伝えられています。

満一八歳の鉾さんが『歌子』となる歌御会を、伝記風小説『凜として』(仲俊二 著 栄光出版社 平成二六年刊)は、実に見事に描出、皇后の息遣いを感じさせる程です。

皇后は「公家の生まれにしては、珍しく陽気で闊達」(同著の中の形容)でした。二歳年下の天皇の「一目惚れ」の入内でした。

そこで私は、揣摩臆測をします。皇后は、歌御会の主宰者でした。権謀に長けた「明治元勳」を統べる天皇には、皇后主宰の歌御会への出席は、安息と愉悦そのものでした。『歌子誕生』の背景に快哉を叫ぶ私なのです。

『歌子』を賜った先生は

身につみておき所なくおもふかな

大内山にたまはりしなを (歌集一三九頁)

と詠みました。これには、感謝の念と恭順の心とが、遺憾なく表現されております。

(次号へ続く)

自校教育「下田歌子がめざしたもの」報告

下田歌子研究所 主任研究員
伊藤 由希子

2015年4月23日(木)、日野キャンパス444教室にて、生活科学部生活環境学科の新入生約100名を対象に、自校教育の一環として、「下田歌子がめざしたもの」というテーマで講義を行った。

下田歌子の経歴の紹介ののち、下田がなぜこの実践という学校を創ったのか、その思いを説明した。

下田が女性の役割として重視し、女子教育において重点的に教えようとしたことのひとつが家政であったが、それは「家政」という言葉にもあらわれているように、男性たちが主に担っている国政や外政に並ぶどころか、「国家の基も、社会の礎も、皆家庭から成るのでありますから、家庭を治め、家族を理むる事は、即ち、国家社会の基礎を作る」(『婦人常識訓』)のような重大な仕事であると下田は考えてい

た。そして、日本の歴史や文学をひもとけば、女性たちが担ってきた役割やその能力は尊重されてきたのであり、そのような日本における女性に対する評価をあらためて確認しながら、女性たちの能力をあらためて活かし、高めていこうと下田は考え、実践女子学園を創設したのである。

1時間という時間の短さもあり、生活科学部の新入生対象ということで、家政についての下田の考え・思いに重点を置いた講義となった。今後学生達が自分が学んでいることについて立ち止まって考えるようなことがあったときに、今回説明した下田の思いがなんらかの助けになればと思う。

下田歌子研究所では、今後も研究成果を学生・生徒たちに積極的に還元していきたいと考えている。

実践女子学園 下田歌子研究所 シンポジウム

「学祖研究の現在」

日時 2015年11月21日(土)

場所 実践女子大学・実践女子大学短期大学部 渋谷キャンパス

詳細については、HPでお知らせいたします。

<http://www.jissen.ac.jp/shimoda/index.html>

皆様のご来場をお待ちいたしております。

『ニューズレター』No.04

発行：2015年6月25日 発行人：湯浅茂雄 編集人：伊藤由希子 竹田真由子 発行所：実践女子学園 下田歌子研究所
〒191-8510 東京都日野市大坂上4-1-1 電話・FAX：042-585-8945 E-mail：shimoda-ins@jissen.ac.jp